《新会員のひと言》

アウシュヴィツで考えたこと

加藤 多一

20年ほど前。アウシュヴィツに二回にわたって行ってきた。

まず一回目。なんとか路線バスを乗りついで現地にたどりつくことができた。

バスの窓から見たとき、あっと気がついた。いかにもドイツ語の響きとつながるアウシュヴィツという地名・道路名の標識がどこにも見当たらない。

外国語に弱いから道に迷ったか――焦っているうちに、はっと気がついた。

ここはポーランド国――つまりポーランド語の国なのだぞ。

（その文字がどういう綴りであったか――今はもう思い出せない）

ナチのドイツ国が侵略し暴虐の限りをつくした土地・施設の名を、ドイツ語で覚えていた――このことは、大きなショックだった。単に私が無知であった、ということにとどまらず、いわゆる通称のもつ危険性に思い至ったからだ。

例えば、私の名前を、ケイトホなんて呼ぶ英語圏のどこかの国が現われたら、心底怒るに違いない。

日本人とくに N・H・K は、平気でこういう暴力をやっている。漢字で表記するアジア系の人名を、当然のように音（おん）読みする。

毛沢東をモウタクトウと平気で呼んでいた（母語ではマオ・ツオ・トン?）。現代中国のトップの政治家を、シュウ・キンペイと呼ぶのも失礼なことだ。

漢字文化を伝統としている国（例えば南北朝鮮民族）をオン読みして平然としているのは問題だ。漢字が共通なのでおよその意味がわかるのはありがたいが、こと人名については、アジア人を蔑視しているからこそ始めた日本国の〈アジア太平洋戦争〉の原因と結果をどうとらえるか、という大問題にもつながってくる。

あの戦争を今でも「大東亜戦争」と呼んでいる人物（相当の知識人）に出会って驚いたことがある。聞いてはみなかったが、こういう人はテンノウ制を疑問視することがない。

そして、歴史上の事実を認める人間のことを〈自虐史観〉ナンテいう。

私はいわゆる「新制中学」の一期生であり、いわゆる スミヌリ世代でもある。敗戦の年（断じて終戦ではない）の秋、神聖視されてきた教科書に教師の指示どおりスミをぬったのだ。（奥付にヒノマルの絵があった）

12 歳の子どもでも、はっきりとわかったこと――テンノウヘイカの意志だと強制されてきた教科書は、ウソの固まりだったのだ。

床においてある教科書の上をまたぐだけでも叩かれた。

東条英機氏は原爆を落とされオキナワをアメリカ軍に占領される前に、トツゼン辞職した。敗戦の直後首相になったのは、ヒガシクニノミヤという名の皇族だった。

テンノウを神とあがめる日本人は、家を焼かれ家族を殺されても、たとえ餓死しても、皇族に反抗することはあるまい――という発想だ。これを許せますか。

――話がアウシュヴィツから大きくそれてしまったが、要は私の無知は（そのままにしておけば）もっと人類史上のマチガイに突入する危険がある、ということを強調したいのだ。

ユダヤ人絶滅工場ともいうべきあそこについての、私のもうひとつのショック――

展示に没入している私をじゃまする若者が現われたのだ。大声で話す。肩をつきとばしたり談笑する生徒たち。

カタコトの英語で聞く。

「どこの学校ですか」

「ドイツの〇〇学校です」

大きな驚きだった。

加害国の少年たちが、被害国にやってきて、自国の先輩たちがやった恐るべきことを学んでいる。（もういくらうるさくしてもいいよ）

日本の生徒たちは、南北の朝鮮人の国に学習しに行ってますか――

日本政府はそのための予算を、各学校に配布していますか。

アウシュヴィツ学習のとき、これらのことをも考えてしまった私です。

（かとう・たいち、児童文学作家）

http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103BooksKumagaiKato.pdf
http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE103BooksTamuraPilecki.pdf